

## 【学術変革領域研究（A）】

### 歴史情報学の創成

|                                                                                  |            |                                                             |                    |
|----------------------------------------------------------------------------------|------------|-------------------------------------------------------------|--------------------|
|  | 研究代表者      | 国立歴史民俗博物館・准教授<br>後藤 真 (ごとう まこと)                             | 研究者番号：90507138     |
|                                                                                  | 研究課題<br>情報 | 課題番号：25A102<br>キーワード：歴史情報学、デジタルヒューマニティーズ、パブリックヒストリー、歴史資料の継承 | 研究期間：2025年度～2029年度 |

### なぜこの研究を行おうと思ったのか（研究の背景・目的）

#### ●研究の全体像

人文学のさまざまな課題に対して情報技術に応用する研究をデジタルヒューマニティーズと呼ぶ。本研究は、そのデジタルヒューマニティーズの中でも歴史学に特化し、その理論と実践の体系化を目指すものである。AIを含む最先端の情報学的手法とデータ基盤を積極的に活用し、従来の歴史学における知の構造を更新することを目指している。本研究では、コンピュータ利用を通じた**歴史学の知の開放と高度化**の二つの軸を持つ。「**歴史学の知の開放**」としては、情報技術に応用し、学際的連携や市民参加型の研究環境を整備することで、従来の個人中心の研究体制を、チーム型・領域横断型へと転換する。デジタルデータの蓄積・公開・可視化、ならびにクラウドソーシングの導入を通じて、知の循環と共創の基盤を形成する。「**歴史学の高度化**」については、人間による資料解釈や分析の一部を情報処理技術により外部化し、再現性と計量性を備えた新たな歴史研究の方法論を探索する。自然言語処理、機械学習、知識生成などの手法を活用し、手書き歴史資料のコンピュータ自動翻刻やテキスト中の固有表現自動抽出といった応用を通じて、人と機械の協働による分析環境の構築を図る。

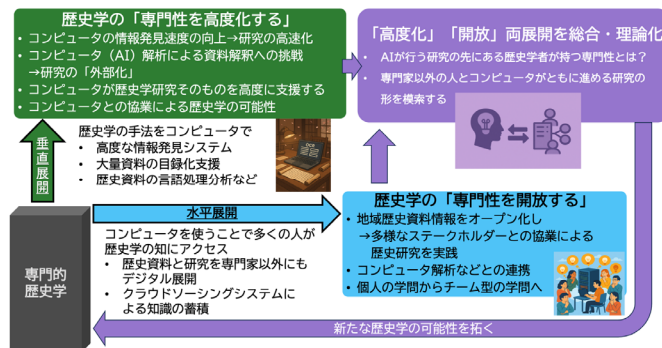
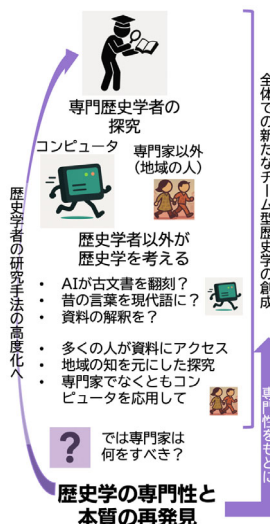


図1 歴史情報学の全体構想(左)

図2 コンピュータ応用による方法論の循環と協業（下）



#### ●歴史学の本質とチーム型研究の両面へのアプローチから、新たな歴史学の形を考える

開放と高度化、二つの歴史研究の方向性を統合的に理論化し、情報学と歴史学、さらに地域の非専門家との協働のあり方を構築するとともに、歴史学の本質とは何かを問い直す。専門家による高度な分析と、非専門家の参加とが共存できる枠組みを整備し、歴史資料とその背後にある知識を社会と共有する仕組みを構築する。

歴史学研究において、多くのステークホルダーが関与しつつも歴史学者が中心で関わる、かつそのような関わりの中で、歴史学の専門性とは何かを常に考え続けるという構造を、一つの循環図として捉える。この循環図「Historian In The Loop」と定義して理論化し、情報社会における歴史研究の新たな地平を切り拓くものである。

#### ●なぜこのような研究領域開拓を試みているのか

これまでの日本の歴史学は、研究者個人が資料を読み、論文を発表する20世紀型モデルが主流であった。デジタル化やデータベースの普及が進んでも、その根本的な研究スタイルは大きく変わっていない。一方、欧米では「デジタル・ヒューマニティーズ（DH）」が進展し、コンピュータを用いた新しい「読み」や知の可視化が人文学全体を変革してきた。こうした世界的な動向を踏まえながら、日本独自の歴史学の蓄積と豊富な地域資料を活かし、**人文学と情報学の協働による新しい歴史研究モデルの構築**を目指す。それは単なるDHの「輸入学問」ではなく、日本から国際的なDHの新たな方向性を提案することも目指している。

とりわけ、日本には膨大な地域資料が現存しており、それらを読み解くことでミクロな歴史像を描き出すことが可能である。このような資源と情報技術を組み合わせることにより、日本発の「地域から世界へ向けた歴史学」が展開できる。この機会を逃せば、国際社会における日本の人文学の存在感が薄れるおそれもある。まさに「今・ここ」で、日本から発信する新たな歴史情報学というDHの形を提案することで、日本における人文学の存在を広く知らせることを目指す。

### この研究によって何をどこまで明らかにしようとしているのか

#### ●全体のチーム構成と狙い

以下のように歴史学の知の開放をA、高度化をBそして理論検討をCという構成でチームを構成した。各チームがやることは以下の通り

#### A1 基盤目録構築班

誰もが入力・利用しやすい歴史資料の基盤目録の在り方を整備する。非専門家もアクセスしやすく、資料の本質を適切に記述できる高度な目録システムのあり方を検討。

#### A2 歴史資料情報高度化班

歴史資料に内包された複雑な知識を整理・構造化し、ナレッジベースとして活用するための方法を開発。資料の来歴や移動、構成の変化といった情報を対象とし、より深い資料理解を支援。

#### A3 地域歴史共有班

地域住民と連携して歴史資料の保存・活用を進める「開放」の実践班。複数地域を対象に、地域ごとの多様な文脈に応じた歴史資料の共同研究を行う。

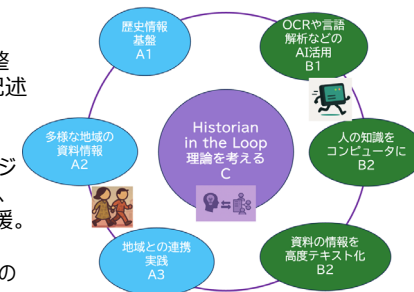


図3 領域内のチーム構成

#### B1 歴史情報学解析班

AIやOCR技術を用いて、歴史資料のテキスト・画像を解析。特に近代初期の文書資料に焦点を当て、資料の読解速度向上と目録作成支援を行う。機械による読解と人文学的な解釈の突き合わせなどを進める。

#### B2 歴史知識情報構築班

歴史資料の機械可読な知識辞書を構築。人物・時代・出来事などの情報を構造化し、資料解析や検索に活用可能な土台を整備。研究者だけでなく市民も知識構築に関われる仕組みも検討し、情報基盤を支える。

#### B3 高度テキスト構築班

国際標準に準拠した歴史資料テキストの整備を通じて、信頼性の高い「研究に基づくデータ」を提供。資料の構造や読みの痕跡をコンピュータに記録し、「人文学の知」をタグとして可視化する。辞書情報との連携も図る。

#### C 理論班

情報学と歴史学、水平展開と垂直展開の実践成果を結びつけ、歴史学の新たな理論枠組みを構築する。専門家の役割や人間ならではの解釈を見つめ直し、Historian in the loopの理論構築を目指す。

#### ●歴史学の新たな可能性を拓くとともに、人とコンピュータの関係を考える

歴史学は、多くの人が関わるができる開かれた学問であると同時に、方法論の深部においては高度な専門性を要する学問でもある。近年、コンピュータやAIといった新たなツールの登場により、その両面を同時に照らし出す可能性が生まれている。歴史情報学に関心をもつ若手研究者とともに、コンピュータにどこまでのことができるのか、そして何を専門的な訓練を受けた人間が担うべきなのかを問い直す。また、より多くの人が参加可能な研究のかたちをどこまで構築できるのかも、あわせて検討する。歴史学の本質を考えつつ、新しい研究モデルを構築することで、より多くの人が歴史や文化に関心を持ち、深く理解することにつながる。それは、人々の生活をより豊かなものにする可能性を秘めている。また、急速に進化するAIへの対応を考えるうえでも、「人とコンピュータの関係性」を問い直す本領域の取り組みは、重要な示唆を与えるものとなるはずである。

